写真ルポ

# 繰り返される「出産の悲劇」

# 日本の「産科医療」に異議を唱える遺族の叫び

写真・構成 伊藤隼也

日本全国で、医療事故が多発している。なかでも、出産に関わるケースは悲惨な結果を生む。たとえば、赤ちゃんや母親が亡くなったり、子供が障害を負うなど、まさに幸福の絶頂から奈落の底へとつき落とされる。事故原因には、さまざまな要因が考えられるが、日本の産科医療システム自体にも問題があるといえる。最近、これらを裏付ける論文がアメリカ医師会の雑誌に掲載された。本誌では、実際に起きた事例をもとに、出産事故を考えたい。

心停止状態で生まれた赤ちゃん。医師の必死の救命作業も実らず亡くなった

転載・二次使用禁止

ケース1

# 子宮破裂、そしてわが子の首にはヘソの緒が…

'99年7月3日未明、花山有希さん（仮名＝当時33）は、家族の期待を背に都内の「N産婦人科病院」へ入院した。長女と次女を産んだ同じ産院ということもあり、何の不安もなかった。

午前8時には陣痛が2分間隔となり、分娩室へ入るが、昼になってもなかなか生まれない。

「経産婦だから甘くみていたのか、たまに様子を見にきても、何の処置をするわけでもなかった」（夫・賢さん・41）

しかし、正午に有希さんの陣痛が強まり事態は急変する。

賢さんの話によれば、午後12時31分に破水をすると、婦長が一方的に陣痛促進剤を打つ指示を出した。そしてそれと並行して、助産婦が有希さんのお腹を押し始めた。

「苦しむ妻を気づかうこともなく、力任せに押しているようでした。陣痛促進剤の量も、妻の状態も確認していない医師に言われるがまま、助産婦が機械的にレベルを上げ続けたんです」（賢さん）

その直後に赤ちゃんの心音が低下。医師は緊急帝王切開の決断をし、横たわる有希さんの手を取って手術同意書に拇印を押させた。

開腹すると有希さんの子宮は完全に破れており、その隙間から赤ちゃんの頭が飛び出っていた。圧迫をまともに受けたうえに、ヘソの緒が首に巻きついて窒息した赤ちゃんの呼吸はすでに停止。たまたま、病院にいた非常勤の医師を呼び、母子ともに緊急の処置をする。赤ちゃんには人工呼吸を行い、すぐに救急病院へと搬送。産院に残った母親は辛うじて助かったが、赤ちゃんは搬送先で11日後に死亡した（前ページ写真）。

搬送の際、看護婦が、「いつもは断られるのに、今日はたまたまNICU（新生児集中治療室）に空きがあってよかったわねえ」と、賢さんに語った。この何気ない発言から、賢さんは同病院の緊急時に対する体制に疑問を抱いた。

また、有希さんに子宮破裂が起きたことについても、医師はいつ破裂したのかわからないという。分娩時の監視体制の杜撰さが露呈した、といわれても仕方なかろう。

「思い返せば助産婦が、子宮が破裂した状態の妻に手術台まで自力で歩くように、促していたんです……」

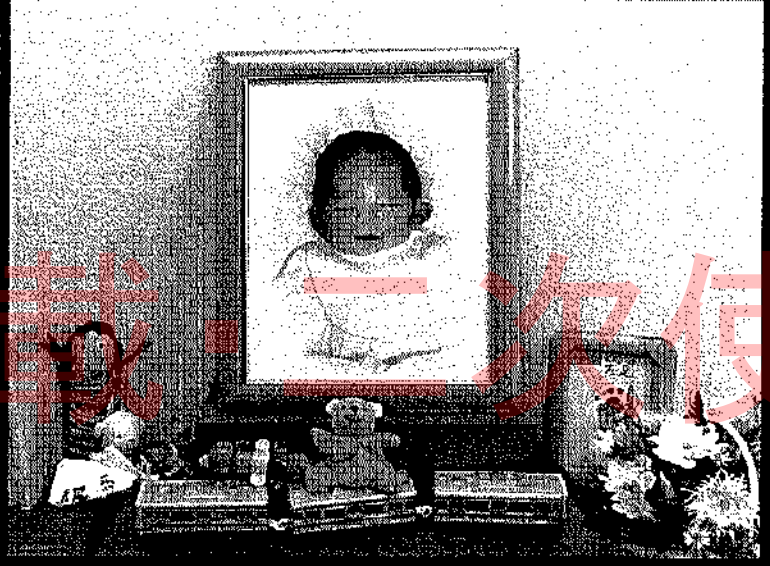
有希さんはこの病院で治療を受けるのがつらく、転院を望んだが、大量出血をした直後にそれは叶わなかった。入院中には婦長が「院長の判断は正しかった」と繰り返したが、有希さんにとってはまさに「地獄のような経験」だった。

退院1週間後、検診で再び同病院へと足を運ぶが、1ヶ月検診を控えているにもかかわらず医師は「もう来なくていい」と吐き捨てるように有希さんに告げた。

「医者の〝もうこれ以上は、関わりあいたくない〟という拒絶が、伝わってきました。今でもこの言葉だけは、どうしても忘れられないんです」（賢さん）

「N産婦人科病院」は、取材に対し、「この件は東京医師会に任せてありますのでコメントできません」と話す。

現在、花山さんはカルテを入手するために、証拠保全の申請をし、裁判を起こすための準備を進めている。



▲花山有希さんは事故のショックで話せる精神状態になかった。かわりに説明する夫の賢さん

▶生後11日でなくなったため、元気な姿の写真がない。安らかな死に顔だ

転載・コピー使用禁止

ケース2

# わが子を失い下半身麻痺になった母親の苦しみ

「意識が残っていた間に、せめて一度だけでも、生きている涼太を抱きたかった」

藤原淳子さん(29)は、当時を振り返ってこう語る。

'99年1月、彼女の初めての子になるはずだった涼太君は、出産時に重度新生児仮死に陥り、生後わずか3日で他界した。

▲仮死状態の涼太君を抱く淳子さんだが、この写真を見ても、「まったく記憶にない」という

彼女自身も、下半身が麻痺し、現在も車椅子生活を余儀なくされている。容赦なく襲う激痛と闘う日々が続き、鎮痛剤や睡眠薬が手放せない。

淳子さんは初めての出産に際し、友人の勧めで無痛分娩を行う"ヒノ井産婦人科医院"(広島市)を選んだ。しかし、後に母親から無痛分娩での事故例を聞かされ不安になった彼女は、院長に安全性を訊ねるが、

「昔とはやり方は全然、違うんですよ。自然分娩や帝王切開よりも、赤ちゃんやお母さんに負担がかからない。無痛分娩は安全です」

と、まるで取り合ってもらえなかったという。当然、事故の危険性に関する説明も一切なかった。

出産当日、淳子さんは分娩室に移った。

「赤ちゃんの髪の毛が見えているから、1時間もすれば出産ですよ」と説明をした院長は、麻酔薬を注入。しかし、赤ちゃんは、ながなか生まれない。淳子さんの不安が深まる中、院長と看護婦たちは淳子さんに背を向け「出ないねえ」などと話をしていたという。

だが、まさにこのとき、赤ちゃんは出かかっていたのだ。振り返って、赤ちゃんの突然の変化に気づいた院長は、早く生ませようと10回以上も吸引を繰り返す。加えて、慣れない様子の看護婦が淳子さんに馬乗りになって腹を押すなど、必死の処置を始めた。が、出てきた赤ちゃんは、頭が異常に変形して心臓は停止、産声をあげることはなかった。

「いつ頃から(新生児の心臓が)止まっていたんだッ」

院長は、突如興奮してどなり散らし、分娩室はパニック状態になった。

近隣の医師に応援を求めるなど、赤ちゃんの救命ばかりに気を取られていた院長は、血まみれでくったりと横たわる淳子さんの異常には気づくのが遅れたようだ。

出血性ショックで命も危うくなった淳子さんが、救急病院に搬送されたのは、出産から6時間も経過してからのことだった。「止血に三時間ほど動かせなかった」と、院長はいうが、搬送されるのが遅れたことは明白だった。淳子さんは一命を取りとめたが、赤ちゃんは助からなかった。

以上が、淳子さんが説明する出産当日の様子だ。院長は2週間ほど搬送先の病床へ日参したが、徐々に意識を回復した淳子さんが「なんで足が動かないの」「どうして子供が死んだの」と疑問を投げかけた日を最後に、二度と病室へは現れなかったという。

数カ月後、ローカル番組に出演をして無痛分娩を声高にPRしている院長の姿がブラウン管に映っていた。淳子さんはこれを機に、'99年7月、同医院を相手に裁判を起こした。

訴状によると、「無痛分娩についての説明義務」を怠ったことや、「胎児仮死に対する対応の誤り」「麻酔の技術的ミス」などの責任を問い、損害賠償を請求している。

本誌の取材に対して「ヒノ井産婦人科医院」の院長が語った。

「無痛分娩自体は安全なんです、淳子さんの場合は、生まれた子供と母体の両方の処置をしなければならず、正直いって、他の医師の手助けが欲しかった」

淳子さんの苦しみはいまなお続いている。

「先生にとっては大勢の中の一人だったかもしれませんが、私にはたった一人の大切な赤ちゃんでした。今でも涼太は私の中で生きています。でも、目に浮かぶのはあの子の白骨なんです」

◀事故が起こった「ヒノ井産婦人科医院」の前にて。病院を見るだけで苦痛を感じると話す

転載・引用禁止

ケース③

# 「子供を残して死ぬなんて…」妻を亡くした夫の悲しみ

「たいていの人は安全に生まれるのに、なぜ……」

大谷英利さん（39）の妻・富子さん（当時31）は出産後、一夜もたたないうちに亡くなった。

'97年10月14日、双子を妊娠した富子さんは、喜びに包まれながら出産日を迎えた。受診していたのは東京・港区の「愛育病院」。産婦人科や小児科の医療では定評がある病院だ。まさかそこで医療事故が起こるとは周りの誰もが考えていなかった。実際、双子の二人目を取り上げるのに多少時間かかったことを除けば、普通の出産で終わるはずだった。

しかし、悲劇はその後、起こった。子宮からの出血が止まらないのだ。

「医師は『意識もはっきりしているし、話もできている。出血さえ止まれば大丈夫です』というんですが、その直後、看護婦が先生を呼びに来るんです。そして、私を残して病室に戻っていく。不安な気持ちで待つしかありませんでした」（英利さん）

出産後2時間近くたっても出血は止まらず輸血がはじまる。その約1時間後、急に医師からこう告げられた。

「動脈を縛るか、子宮を取れば出血は止まります。この病院では処置できないので東大病院へ移送します」

救急車が到着。出産を終えてからすでに4時間近くが経過していた。分娩室から出てきた富子さんの意識はすでにない。一刻を争う事態となり、急遽、近くの救急病院に転送先が変更されるもすでに時遅し。必死の救命処置の甲斐もなく帰らぬ人となった。

愛育病院の医師からは「羊水塞栓の疑いがあった。これは、恐ろしくて致命的なものだ」と説明があったが、解剖結果の死因は出血性ショック死。はっきりした「羊水塞栓」は認められなかった。

不信感を募らせた英利さんは、弁護士に相談。その後、多くのことが明らかになった。

なんといっても出血に対して、輸血の量が圧倒的に不足していたのだ。当時の愛育病院には麻酔科医がおらず、富子さ

▲富子さんの遺影を持つ夫・英利さん。仏壇の右下には、長女が描いた似顔絵がある

協力／医療情報市民オンブズマン・メディオ（東京☎03-5323-5260　長崎☎0594-31-6513　http://www.hypertown.ne.jp/medio/）



転載・二次使用禁止

▲出産を間近にひかえた富子さんとの最後の写真。まさか直後に悲劇が襲うとは考えもしなかった

んの患化した全身状態を管理できずに手術に踏み込めなかったこともわかった。

'99年11月、病院側は緊急事態に対応する医療体制に不十分な部分があったことを認め、和解が成立。今後、不測の事態に対して迅速にかつ的確に対応できる体制作りをするという約束も取りつけた。

「こちらは、うまくいって当然という気持ちがありますよね。出産は万が一に備えて前もって準備のできる分野だし、そのために十分な体制でいて欲しいんです」(英利さん)

愛育病院は、この事故後の'98年4月より東京都の「総合周産期母子医療センター」に指定され、専門病院として中心的役割を果たそうとしている。24時間、複数の産婦人科医が常駐し、麻酔医も配置された。また、NICUのみならず、PICU(母体・胎児集中治療室)も設置。さらに、緊急時に迅速な輸血を行うため、事前にすべての妊婦に新たな血液検査を行うなど整備も進んでいる。

しかし今回、富子さんの事故について取材をすると、愛育病院の産科部長は「あれは、医学的に救命できないケースで、こちらに責任はない。手は尽くした」と話し、病院側弁護士も「(富子さんの事故の後)大谷さんのご両親に不幸な事故もあって、そういう状況だから裁判ではなく和解ということになった」という。

モノは整備されたが心の整備は追いつかないようだ。しかし、英利さんはこう語るのだ。

「いまでも主治医の方は良くやってくれたと思っています。ただ、時がたって、表面的には心の傷口が埋まったように見えるんですが、子供を育てる喜びを感じるにつけ、妻の死に対してもっと深い悲しみに襲われてしまうんです」

双子の成長を見守る英利さんの心の痛みが癒される日はくるのだろうか。

●　●

まずは左の表を見て欲しい。産婦人科医師総数こそ他国と差はない。注目すべきは施設一つあたりの医師数の差だ。他国と比べ、日本は圧倒的に少ない(表・左下)。つまり、日本では"ひとり産婦人科医"による出産がいかに多いかが示されている。

左上の表を見てもわかるように、ひとり医師のところでは、本来救えたはずの人が多くなっている。欧米では、ひとり医師の施設で、しかも支援体制も不充分なところでお産をすることはまずない。ひとり産婦人科が多い日本では事故例が多いのは当然の結果といえる。

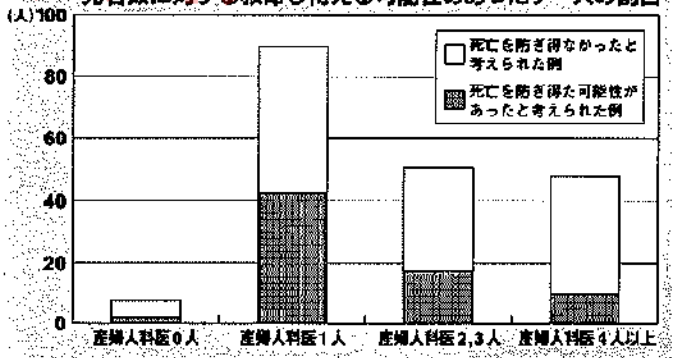
個々の医師の技量も当然だが、一番問題なのは産科施設の体制である。十分なマンパワーと支援体制を持つことが、安全なお産につながる。

「産科はすべて救急である」と考える医師も多い。お産をするときには、複数の産科医師の存在や、支援体制の有無、大病院であれば麻酔科医の存在などを確かめたい。

しかし、現在の状況では、誰しもが体制の整った病院を選ぶのに難しい。

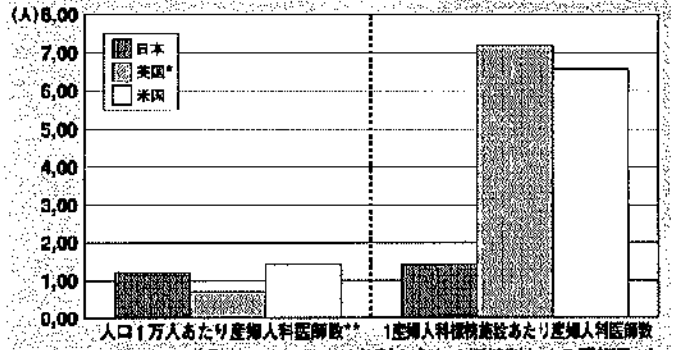
日本の産科医療システムの早急な改善を願ってやまない。

死者数に対する救命し得る可能性のあったケースの割合




▲表を見るとひとり産婦人科医に死亡事故が多い。医師数が増えるにつれ、減少するのがわかる。(調査1992年)

日本と欧米の人口と1施設に対する産科医師数




▲★Englandの推計値　★★日本は他科を主たる標榜科とする医師及び研修医を含むが、英国及び米国は専門医のみの数値(調査1994年)

上:「JAMA vol 283, N 020 2661-2667」より改変　下:「日本の母体死亡」(三宝社)より

転載・引用禁止